

竹本攝津大掾

本名二見金助、天保七年丙申の三月十五日大阪順慶町に生れ、初め鶴澤龜次郎として三味線彈であつたが、その師三代目野澤吉兵衛に天性の美音を見込まれ、五代目竹本春大夫の門に入り竹本南部大夫(初代)と名乗り、大夫に轉じた。その後、右吉兵衛に連れられ江戸へ下り、吉兵衛の父初代竹本越路大夫の年回に當りその二代目を繼ぎ、それより三ヶ年江戸各所の寄席を廻る内、吉兵衛は病歿したので、間もなく歸阪し師匠春大夫の傘下に出勤した。當時春大夫は文樂と分離して居り、大阪や京都の各小芝居、或ひは九州への旅興行を廻る内、慶應元年三月より師春大夫と共に初めて稻荷文樂軒芝居に出勤し、明治元年二月から相三味線に初代豊澤新左衛門を得て次第に役もつき、同三年十月には「狭間合戦」の奥御殿を勤め、始めて切語りとなつた、この頃より名人初代豊竹古軼大夫が文樂軒芝居へ入座し、兩人の競争は當時の聽客を唸らせたが、蓋し越路の一苦境時代であつた。次いで同十年九月より同十七年七月まで相三味線に名人圓平を得、越路の本格的な藝は全くこの八年間に完成されたといつてよい。この間十六年四月より文樂座の櫓下となつた。同十七年七月より相三味線は五代目野澤吉兵衛となつたが、越路の藝は愈々圖熟期に入り、三十五年九月には小松宮彰仁親王殿下より竹本攝津大掾たる令旨を賜はり、同三十六年一月に一旦師名竹本春大夫の五世を襲ひ、後直ちに同

五月より攝津大掾と受領し、「妹背山三段目」の定高と「同四段目切」を語つてその披露をしたが、その興行日数は實に七十五日間となり彼の生涯中最も名譽ある部分であると共に、當時を中心として、文樂座、延いては明治淨瑠璃界に空前絶後の絢爛期を出現せしめた。爾來明治の晩年より大正に入つては大掾の老熟期ともいふべく、遂に大正二年四月、「楠普郎三段目切」を七十八歳の高齡を以つて五十一日間勤め了せ斯界を引退し、同六年十月十九日八十二歳を以つて他界した。法名春曉院殿越峰掾居士、墓は大阪市北寺町寶珠院にあり。

斯の如く大掾は明治期に於ける斯界の第一人者で、また古來の名人の中にも當然屈指される者であるが、その藝風は濃調嬌艶、天來の美音で衆人を魅了したが、一方それに對する一種の反感的迎合を以て、時人の一部は大掾風の藝を嫌厭し、外面的な藝風に於いては全く相反した大隅大夫(三代目)を歡呼したと聞き及び、その感は現在に於いても存續されてゐるやうだが、これは全く眞の大掾を識らざるものにて、大掾は文樂座の營業政策上座主よりの希望にて、その天性の美音を利用して、大衆藝を餘儀なく演じてゐたもので、その目的が全然營利を離れたる場合の藝は、大掾も大隅も根本的には全く一致した本格的なものであつたと信ずるそれには、大掾歿後、單に天性の美音の點では大掾に左程の遜色を取らぬ近世の大夫が、大掾の語り物として自他共に許し、且その成功の原因が全く彼の美音にあると誤解をされてゐた「中將姫雪責」、「廿四孝十種香」や「先代萩御殿」の如きを語つても一つとして満足なものが無いといふ歴然たる證據がある。言葉を換へれば、大掾が前述の如き語り物がよかつたのは、彼が天性美音であつた爲でなく、本當の義大夫節が語れてゐたからである。そして天性の美音は、それがあつた方が一層都合がよいといふに止るものである。茲に大掾歿して二十五年、その年忌に當り、右の點を斷言しておく。